３　取組の重点

～本市学力向上の取組の重点を「授業改善＋学びに向かう学校づくり」におく ～

全国学力・学習状況調査における学校質問紙の結果からは、「めあての提示」等、本市における学校の積極的な授業改善の取組状況がわかる。一方、**児童生徒の「話を聞く姿勢」等**の課題もあり、**「学びに向かう姿勢」を意識した更なる授業改善**が必要です。

また、次期学習指導要領の移行期間を円滑に進めていくためには、子供たちにこれから必要とされる資質・能力の育成の視点を盛り込んだ「授業改善」に取り組んでいくことも必要です。

こうした背景からも、本県学力向上プロジェクトの推進期間に合わせ、本市における学力の向上取組の重点を「授業改善」と「学びに向かう学校づくり」におき、幼・小・中が連携し、系統的・継続的な授業改善の推進を支える方策を明確にし、市全体で一体感をもって推進することで、子供たちに確かな学力を育むことができると考えます。

今後２年間の推進期間においては、以下の２点を基に授業改善を推進し、学力向上を図ります。

１　幼・小・中が連携し、系統的・継続的な授業改善を推進する。

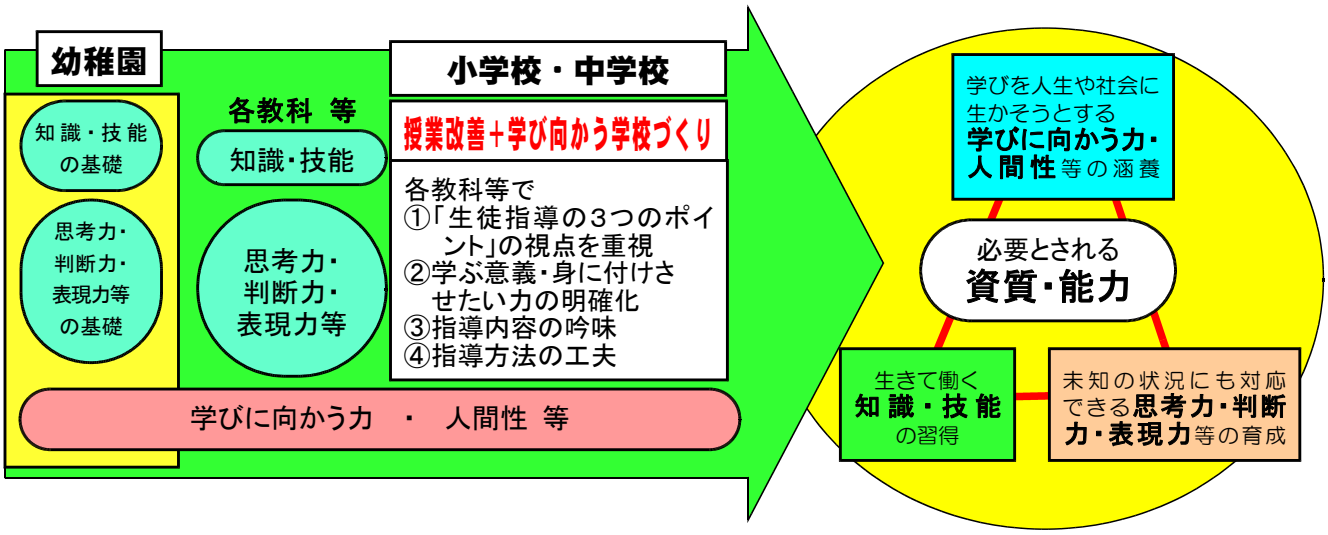
【授業改善の方向を示すポイント】

- **◆各教科等における学習規律の確立（聞く姿勢）**
- ◆各教科等で学ぶ意義・身に付けさせたい力の明確化（何ができるようになるのか）
- ◆各教科等の指導内容の吟味（何を学ぶのか）
- ◆各教科等の指導方法の工夫（どのように学ぶのか）

【各学校の取組】

- **◆中学校区内における「学びに向かう学校づくり」の取組強化へ**
- ◆子供たちに必要とされる「資質・能力の３つの柱」で整理した評価計画へ
- ◆「カリキュラム・マネジメント」を生かした指導計画へ
- ◆「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業へ

確かな学力向上のための「 授業改善 ＋ 学びに向かう学校づくり 」イメージ図



２　「授業改善6つの方策」を本市全体で共通実践する

方策1：めざす授業像の共有	**方策4**：学習を支える力の育成
方策2：教材研究の充実	**方策5**：集団づくり・自主性を高める取組の充実
方策3：学力向上マネジメントの推進	**方策6**：教育行政による効果的な支援体制の構築

4　授業改善6つの方策

幼児児童生徒の「確かな学力」の向上を図るため、県教育委員会、市教育委員会、学校が連携し、授業改善６つの方策をもとに取組を進めます。

方策1　めざす授業像の共有
めざす授業像を共有し、授業改善の取組を展開する

方策2　教材研究の充実
多様な教材研究の方法を共有することで、授業改善の推進力を高める

方策3　学力向上マネジメントの推進《共有・浸透》
マネジメントを機能させ、全校体制で取組を推進する

方策4　学習を支える力の育成
学習を支える力を育成することで、子どもたちの学習意欲を高め授業改善を下支えする

方策5　集団づくり・自主性を高める取組の充実
支持的風土づくりや生徒指導の三つのポイントを生かした授業改善を推進する

方策6　教育行政による効果的な支援体制の構築
教育行政の学校支援体制を充実させ、学校と共に授業改善を推進する

石垣市スタンダード　小中共通実践

(1)学習規律について　～ 小・中共通した学習規律 ～

授業前		・授業開始前に教室に入り、授業の準備をして静かに待つ。
授業中	聞く	・話し手を見て姿勢を正し、「目」と「耳」と「心」で聴く。 ・発表内容にうなずく等、反応を示す。(「良い聞き手」が「良い話し手」を育てる)
	話す	・聞き手に聞こえるように、はっきりと話す。 ・話の筋道（根拠）を立て、明確に話す。
	書く	・主語と述語を含んだ文章を書く。 ・「丁寧に書く」ことを心掛ける。

(2)授業スタンダードの概要　～ 小・中共通した授業実践(主体的・対話的・深い学び)の流れ ～

＊生徒指導の３つのポイント（自己決定・自己存在感・共感的人間関係）を生かした授業の流れ

指導過程	授業実践内容	
導入時	何を学ぶか	□課題・めあての設定
展開時	どのように学ぶか	□自力解決（ひとり学び） □ペア・グループでの学び合い（相談・意見交換 等） □学級全体での学び合い(グループの発表→意見交換 等)
終末時	何が分かったか・できたか	□振り返り（まとめ）

～全国水準の学力を授業で保障していきましょう♪～

方策１　めざす授業像の共有

－めざす授業像を共有し、
授業改善の取組を展開する－

これから必要とされる資質･能力を育成するために、めざす授業像を共有し、めざす子供の姿が実現できるよう学びを支援する授業を展開する。

めざす授業像

他者と関わりながら、課題の解決に向かい「問い」が生まれる授業

↕

石垣市スタンダード（学習規律・授業スタイル）の小中共通実践

めざす子どもの姿

- ○ 主体的に「問い」をもち、自分なりの考えをもつ
- ○ 他者との交流を通し、「問い」が生まれ自分の考えを広げ深める
- ○ 学びの過程を振り返り、新たな「問い」をもつ

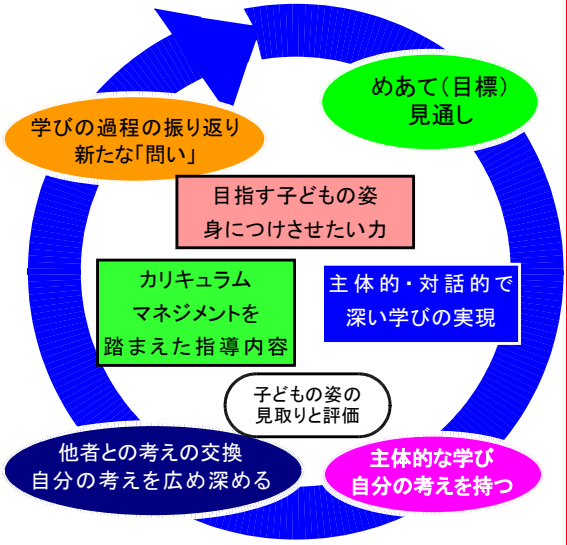
《　子どもの学習活動例　》

- ・課題から「問い」を発見する。
- ・めざすゴールをイメージする。
- ・課題の解決に向けた見通しをもつ。
- ・既習の知識・技能を活用して課題に取り組む。
- ・比較、分類、類推するなど多角的・多面的に考える。
- ・他者との交流を通して、自分の考えを吟味する。
- ・学びの過程を振り返り、新たな「問い」を見い出す。
- ・自己評価を通して、自分の変容を確認する。

《　教師の支援例　》

- ・学習規律、支持的風土の確立（**※本市の重点課題**）
- ・子供の「問い」を引き出す課題の提示
- ・子供の「問い」を生かした「めあて(目標)」の設定
- ・見通しをもち、めざすゴール(評価規準)をイメージさせる工夫
- ・自分で課題に向き合い考える時間の設定
- ・既習の知識・技能を活用する場面の設定
- ・比較、分類、類推など深い学びにつなげる発問の工夫
- ・他者との交流を通して、自分の考えを吟味する等、深い学びにつなげる場面の設定
- ・多様な意見や考えを整理・分類し、まとめさせる工夫
- ・「めあて」と正対した「まとめ・振り返り」の確実な実施
- ・学びの過程を振り返り、新たな「問い」をもたせる工夫
- ・定着状況の的確な把握と必要に応じた手立ての工夫
- ・子供の姿の見取り(評価)を生かした授業展開(指導)

めざす授業像のイメージ図



方策２　教材研究の充実

－多様な教材研究の方法を共有することで、
授業改善の推進力を高める－

授業改善を計画的・継続的に推進していくとともに、「学び続ける教師」として実践を積み上げ授業力を高めていくためには、教師一人一人がカリキュラム・マネジメントを意識し、多様な教材研究の方法を職員間で共有し、組織的に教材研究を進めていくことが重要です。

１　「教材研究ツール」の活用

授業改善を進める上で、子供の実態把握や授業の振り返りを含めた教材研究を重ねることが重要です。下記のような「教材研究ツール」を日常的に活用することで、授業力が高まります。

《　教材研究ツール　》

○教材研究ノート　○板書型指導案　○授業プランシート
○授業振り返り3点ツール（ 板書計画 ・授業板書 ・児童生徒ノート ）

２　各種資料の分析・活用

教材研究を充実させるためには、各種調査等の結果分析を行うとともに、授業づくりに係る資料等の活用を通して、授業改善につなげることが大切です。

《　学力調査等の結果分析　》

○全国学力・学習状況調査（小6・中3）　○県学力到達度調査（小3～中2）
○標準学力調査・生活実態調査（小2～中2）　○中3学力検査
○中1地区実力テスト　○学力向上Web調査　○学校・学級の実態調査　等

３　組織的な取り組みの充実

授業改善に取り組むためには、教師一人一人がカリキュラム・マネジメントを意識した授業を実践し、さらに、教師一人一人の日々の授業実践を組織体制で支える必要があります。

（1）学年会・教科会の充実

授業改善を効果的に推進するためには、学年会や教科会を教材研究を深める場とすることが大切です。学年会や教科会を十分に機能させ、教材研究の充実を図ります。

（2）授業研究会の充実

授業研究会では、めざす授業や子供の姿の実現を図れたかどうかについて協議し、具体的な授業改善につなげていくことや、教科や学年、校種間の枠を越えた共通の視点をもって協議することなどが重要である。

（3）幼・小・中の連携　～「 和 」をもって共通実践～

めざす授業や子供の姿の実現を図るためには、系統的・継続的な取組を進める必要があり、そのためには、幼・小・中が学びの連続性・系統的な指導を意識し連携することが大切です。

方策３　学力向上マネジメントの推進《共有・浸透》

ーマネジメントを機能させ、
全校体制の取組を推進するー

全ての教職員が学力向上の具体的な到達目標を共有し、取組を徹底、連動していくことで、実践意欲を高め、学校全体で授業改善を推進し、児童生徒の学力の向上を図ります。

１　学力向上マネジメントを機能させる

（1）ビジョンの構築・共有・浸透

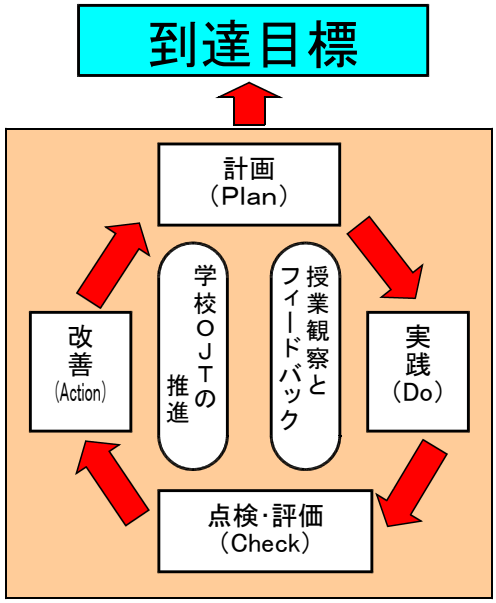
めざす子供の姿、めざす授業像を共有し、浸透させる。

（2）到達目標の設定及び具体的な手だての明確化

具体的な到達目標を設定し、到達目標に向けた具体的な手だてや道筋（学力向上年間サイクル）を講じ、その意義を全職員で共有する。

（3）PDCAサイクルの円滑な推進

取組の進捗状況を定期的に点検し、課題については新たな改善策を講じるPDCAサイクルを円滑に推進し、学力向上の取組をマネジメントする。



２　全校体制による取組を推進する

（1）管理職による日々の授業観察とフィードバック

管理職は日々の授業及び教育活動を観察し、個々の実践について適宜フィードバックを行い、授業改善を推進する。

（2）学校OJTの推進

学年会、教科会、校内研究等の充実により、同僚性を構築し職員相互が学び合い、成長を促す職場風土を醸成する。

方策４　学習を支える力の育成

ー学習を支える力を育成することで、子どもたち
の学習意欲を高め授業改善を下支えするー

授業改善を推進していく上で、その土台となる「学習を支える力」を育成していくことは重要です。特に以下の点については、学校・家庭・地域が連携し積極的に取り組みます。

規範意識・マナーの向上

学校生活や家庭生活を通して、挨拶、返事等の習慣化、他人を思いやる心や認め合う心等を育む。

学習環境の充実

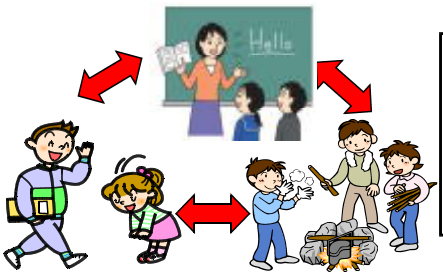
学習の準備、始終業時刻の遵守等、学習規律を徹底するとともに、机やロッカー、掲示物等の教室環境を整える。　学

読書活動の充実

図書館等の活用を推進し、主体的・目的的な読みの力を培うとともに、読書をする習慣を身に付け、豊かな心を育む。

家庭学習の習慣化

家庭では、家庭学習を習慣化させるとともに、学校では「授業と連動した宿題」及び「自主学習」を推進する。



部活動の充実と適正化

部活動への加入促進と活動時間等の適正化を図り、学習意欲の向上や責任感・連帯感を涵養する。

生活リズムの確率

毎朝きちんと朝食をとり、「食べて、動いて、よく寝よう」を実践し、規則正しい生活リズムを確立する。

対話の充実

家庭を中心とした対話を通して、心の居場所をつくり、絆を深め、自尊感情を高めて、夢や希望を育む。

体験活動の充実

体験活動を通して、生活や学習に対する興味・関心・意欲を高め、問題発見・問題解決能力を育成し、社会性を育む。

方策５　集団づくり・自主性を高める取組の充実

－支持的風土づくりや生徒指導の三つの機能を生かした授業改善を推進する－

互いに高め合える集団づくりを通して、個人・集団における自主的・実践的な態度を育成することは、「他者と関わりながら、課題を解決し『問い』が生まれる授業」の土台となる重要な要素です。集団づくり・自主性を高める取組の充実をめざし、以下の３点を推進します。

○　支持的風土をつくる学級経営

教師と児童生徒の信頼関係や児童生徒相互の温かい人間関係を築き、子供同士が自分の考えや思い等を安心して表現できる支持的風土は、主体的・対話的な学びの基盤となる。支持的風土を醸成できるよう学級経営の充実を図る。

○　生徒指導の三つのポイントを生かした授業の日常化

よりよい集団づくりや自主性を高めるためには、他者と関わることの良さを実感し自分なりの考えをもって行動できることが重要である。そのためには、「生徒指導の三つのポイント」（**①自己存在感を与えること、②共感的な人間関係を育てること、③自己決定の場や機会を与えること**）が生かされた授業を日常的に実践する必要がある。

○　学びに向かう集団づくりを進める学級活動及び児童会・生徒会活動

児童生徒の自主的・実践的な態度を育てることは、個々の児童生徒や集団における問題解決能力の高まりにつながる。学びに向かう集団づくりを進めるために、学級活動や児童会・生徒会活動等の充実を図る取組は重要である。

方策６　教育行政による効果的な支援体制の構築

－教育行政の学校支援体制を充実させ、学校と共に授業改善を推進する－

学校における授業改善の取組の充実を図るためには、教育行政による効果的な学校支援体制を構築する必要があります。本市教育委員会も施策の浸透を図るとともに、学校現場を第一に考える直接的な学校支援を重視します。

１　学校支援訪問等の充実

幼小中との連携体制を構築し、学校支援訪問等を通して、学校における学力向上の取組を計画的継続的に支援します。

《　主な支援内容　》
- ○授業改善
- ○学力向上マネジメント
- ○集団づくり・自主性を高める取組　等

２　学力向上推進本部会議による提言

県教育庁関係各課、各教育事務所、県立総合教育センターで構成されている学力向上推進本部会議は、学力向上に係る取組の改善・充実を図るために、県全体で取り組むことが効果的だと考えられる事項について提言していきます。

本市教育委員会も提言を受け、各関係機関並びに幼小中との連携を図りながら学力向上推進を図りたいと考えています。